

猿 橋
小 学 校

瑛 玖 良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

肯定的な言葉掛け

校長 澁谷 一男

「校長先生、あさがおの芽が出たんだよ！」朝、数名の 1 年生が報告に来た。手を引かれ、1 年生のベランダに行ってみると、かわいらしい双葉が 4～5 本顔を出していた。きっと、「早く芽を出してね」と毎日声を掛けながら水をやっていたのだろう。

掃除が終わって、教室へ走って戻る子に、「歩くよ」と声を掛けている子がいた。すれ違う一瞬の出来事で、振り向きざまに「いい注意だね！」と言ったが、果たして本人に届いたか。3 年生か 4 年生の子どもだったと思うが、名前を確認できなかったことが悔やまれる。

それにしても、こんな注意の仕方のできる子がいたことに驚く。何気ない日常の一コマであるが、この子は、普段から友達に対して、こうした言葉掛けができているのだろう。

ではなぜ、そんな言葉掛けができるようになったのか。それは、その子の周りの大人が常にそういうものの言い方をしているからに違いない。

日々子どもと接していると、「そんなことしちゃダメ！」「もう、何回言ったら分かるの！」と頭ごなしに叱ってしまうことは誰にでもあるだろう。子どもの不適切な言動が繰り返されれば、それを厳しく叱責してしまうのは無理からぬことだ。しかし、何度も同じことを繰り返して注意されているのは、子どもの自己肯定感が育たないばかりか、逆に反発心を抱くことにもなる。中には、「ダメ！」という言い方で自分が全否定されたように捉える子もいる。叱る大人にとってもメリットがあるとは思えない。

そこで、否定的な言葉を肯定的な言葉に変えてみる。先の子が使っていた「歩くよ」がまさにそれだ。「走っちゃダメ！」ではなく、「歩くよ（歩きましょう）」なのである。「席を立ててはダメ！」ではなく、「座りましょう」、「しゃべっちゃダメ！」ではなく「静かにしましょう」、肯定的な言葉掛けによって、子どもが受け取る印象は随分変わるはずだ。もちろん、人を傷つける行為や命に関わるような危険な行為に対しては、してはいけないことを毅然と分かりやすく伝えなければならないことは言うまでもない。

昨年度とは打って変わって、晴天の下で実施できた運動会。精一杯頑張った子どもたちは、それぞれ肯定的な言葉をたくさん掛けてもらったことだろう。

春の陽光はいつしか夏を思わせる日差しに変わった。1 学期も後半である。

